

モモ予備摘果指導会資料

県北農林事務所 伊達農業普及所
J A ふくしま未来伊達地区モモ生産部

1 気象経過

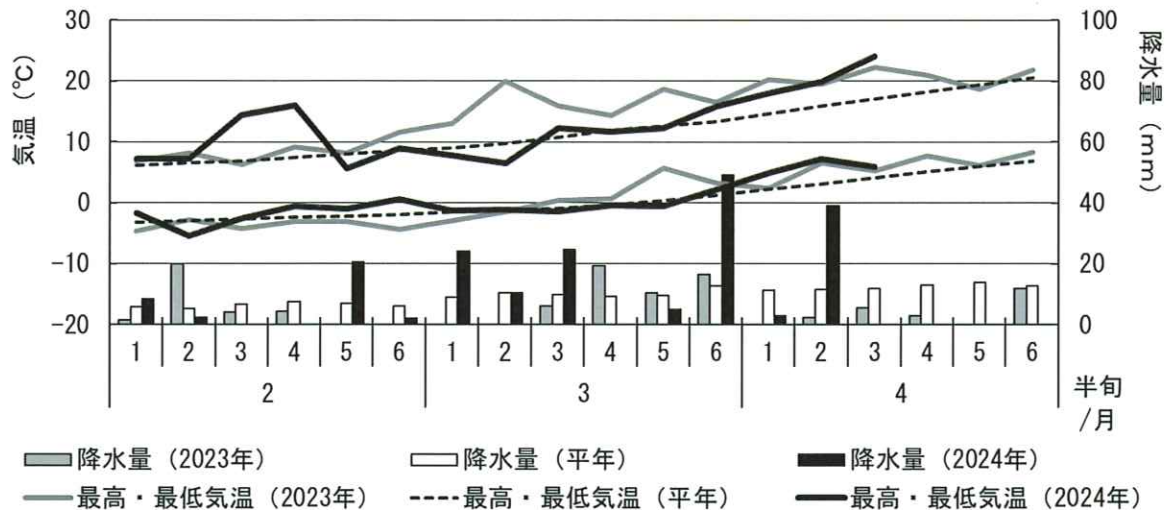


図1 気温と降水量の推移（観測地点：伊達市梁川町）

2 今後の気象予測

東北地方における4月20日から1か月の気温は、高い確率が80%、平年並・低い確率が10%である。降水量は、少ない確率が30%、平年並の確率が40%、多い確率が30%である。

気温、降水量、日照時間の各階級の確率 (%)			
気温	東北地方	向こう1か月 04/20~05/19	10% (低い) 10% (平年並) 80% (高い)
		1週目 04/20~04/26	10% (低い) 20% (平年並) 70% (高い)
		2週目 04/27~05/03	10% (低い) 10% (平年並) 80% (高い)
		3~4週目 05/04~05/17	10% (低い) 30% (平年並) 60% (高い)
降水量	東北日本海側	向こう1か月 04/20~05/19	40% (低い) 30% (平年並) 30% (高い)
	東北太平洋側	向こう1か月 04/20~05/19	30% (低い) 40% (平年並) 30% (高い)
日照時間	東北地方	向こう1か月 04/20~05/19	40% (低い) 40% (平年並) 20% (高い)

図2 東北地方の1か月予報（4/18発表 気象庁ホームページより）

3 生育経過

管内の調査ほ場における開花盛りは、「あかつき」が4月10日で平年より8日早く、「川中島白桃」が4月12日で平年より6日早かった。

表1 生育概況

(調査地: 桑折町伊達崎)

品種	開花始め			開花盛り		
	本年	平年	R5	本年	平年	R5
あかつき	4/5	4/13	3/16	4/10	4/18	4/5
川中島白桃	4/7	4/12	3/16	4/12	4/18	4/7

3 栽培管理

表2 「あかつき」の摘果の日安

内容	時期	基準など
予備摘果	4月30日～5月10日頃 (満開後20～30日頃)	・最終着果量の50%増とする。
仕上げ摘果	5月20日～5月30日頃 (満開後40～50日頃)	・最終着果量の20%増とする。
硬核期	5月31日～6月17日頃 (満開後51～68日頃)	・障害果の発生を助長するため、この時期の摘果を控える。

※ 摘果程度は樹勢等に応じて調整する。

※ 硬核期は、満開後の気温が高く経過すると早まるので注意する。

(1) 予備摘果

ア 目的および方法

目的：果実の初期肥大を促進する。

新梢の初期生育を確保する。

時期：満開後20日頃から実施する。

程度：結果枝当たりの着果数は、長果枝に4～5果、中果枝に2～3果、短果枝2～3本に1果を目安とする。

備考：樹勢の強い樹では、最終着果量の2倍程度を限度に果実を多めに残し、硬核期以降に修正摘果で目標着果量に制限する。樹勢の弱い樹では結実が確認できたら早めの実施し、樹勢回復を図る(表3)。

表3 樹勢と着果量

樹勢	予備摘果後の着果量
強	最終着果量の2倍程度
普通	最終着果量の50%増
弱	最終着果量の20%増

イ 予備摘果のポイント

(ア) 花粉がある早生種(「暁星」

「ふくあかり」等)から実施

し、次に花粉がある中生種で結実の良い品種(「あかつき」「まどか」等)を実施する。

(イ) 「川中島白桃」「はつひめ」等の花粉が無い、または少ない品種は、結実を確認してから(満開後25日頃)作業に入り、結実量が少ない場合は仕上げ摘果を主体に行う。

(ウ) 結果枝の長さに応じて残す果実数を調整する(表4)。この場合、2次伸長した枝の部分は、結果枝の長さには含めない。なお、着果させる位置は、葉芽のある部位を優先して残す。

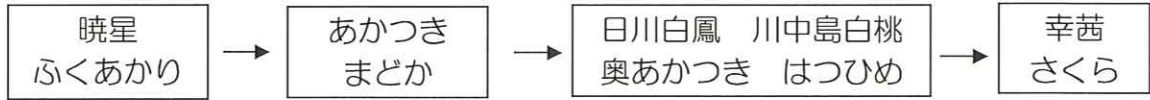
(エ) 極端に小さい果実や上向き果、傷害果を優先して摘果する。

表4 結果枝の長さとう着果数

結果枝	長さ	予備摘果後の着果数
極短果枝	5cm以下	2～3本に1果
短果枝	5～15cm	2～3本に1果
中果枝	15～30cm	2～3果/枝
長果枝	30～50cm	4～5果/枝
極長果枝	50～cm	葉芽当たり1果

(オ) 着果量は、樹冠中央部の高さを 100 とすると、日当たりが良い上部では 110~120、下部や樹冠内部では 80~90 程度に調整する。凍霜害で下枝の着果が不足する場合は上部に果実を多く残し、必要な着果量を確保する。

【摘果の順序】



【長果枝・中果枝の摘果程度の目安】

●：残す果実 ○：摘果する果実

結果枝	長さ	枝を上から見た場合の模式図 (普通樹勢：最終着果量の50%増の場合)	
		予備摘果	仕上げ摘果
中果枝	15~30 cm		
長果枝	30cm 以上		

※ 予備摘果時は、結果枝の長さに対して、15cmごとに2個残すのが目安となる。

【倍量着果の場合における着果位置】

	○正しい着果位置 (互い違い)	×誤った着果位置 (同じ側)
模式図 (上面図)		
	目標着果部位の左右に、位置をずらして残す	同じ側だと仕上げ摘果時に迷う

(2) 追肥

基肥追肥一発型肥料を基肥に使用した場合は、「あかつき」等の中生種までの品種では追肥を控える。

「川中島白桃」以降の晩生種では、樹勢回復等で必要な場合のみ実施する。

追肥の目安は、窒素成分で 1 kg/10 a 程度とする。

(3) かん水

満開から約 1 カ月は細胞分裂期に当たり、一定の土壌水分が必要であるため、降雨が見られない日が 1 週間以上続くなど、土壌の乾燥が見られる場合は、適宜かん水を実施する (追肥した場合は必ずかん水する)。かん水ができない場合は樹冠下マルチなどにより、土壌水分の蒸散を防ぐ。

4 病虫害防除

本年は生育が平年より早まっているため、薬剤散布が遅れないように実施しましょう！

(1) モモせん孔細菌病対策

ア 春型枝病斑の判断 (写真2)

- (ア) 病斑は主に1年枝に発生し、病斑部は枝の表面が黒ずみ、亀裂が生じる。
- (イ) 病斑部から発生した新葉は、赤っぽく変色し、やがて枯れる。
- (ウ) 病斑部やその周辺は新梢(葉芽)が枯死したり、伸びが悪くなる。

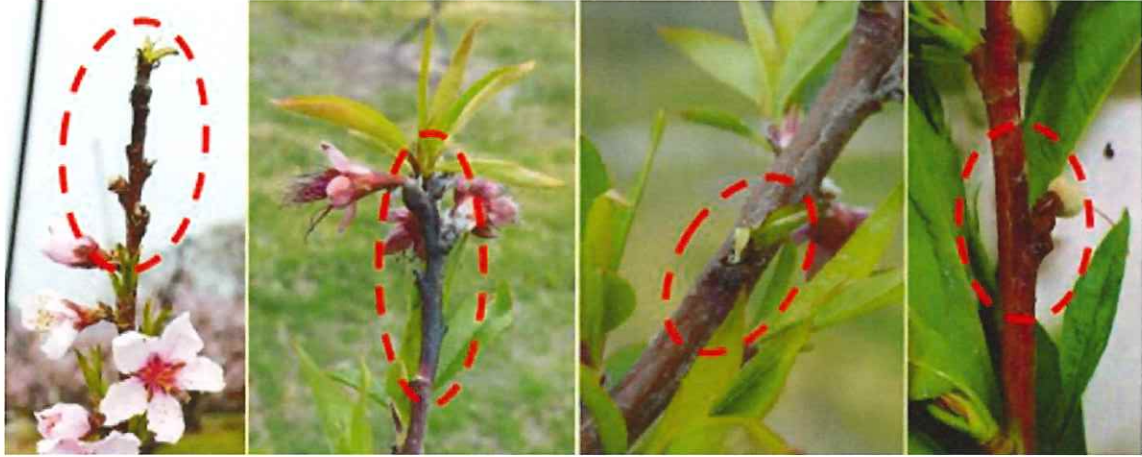


写真2 モモせん孔細菌病の春型枝病斑

イ 春型枝病斑の除去

葉や新梢に2次感染する前に、春型枝病斑を見つけ次第必ずせん除して、土中に埋めるかほ場外に持ち出す等適切に処分し、伝染源の密度低下に努める。

- (ア) 実際に春型枝病斑か判断が難しい1年枝の黒変や芽の生育不良など、発病が疑われる枝は見つけ次第せん除する。
- (イ) 病斑が先端部であっても、基部側の芽に菌が感染していることが多いことから、短果枝は基部ごと、中長果枝は基部ごとまたは基部付近の葉芽まで切り戻す(写真3)。
- (ウ) 第4回のクプロシールド(クレフノン加用)の散布後、白い薬斑により春型枝病斑が見えにくい場合は、芽枯れした部位や新梢の生育不良を目印にせん除する。

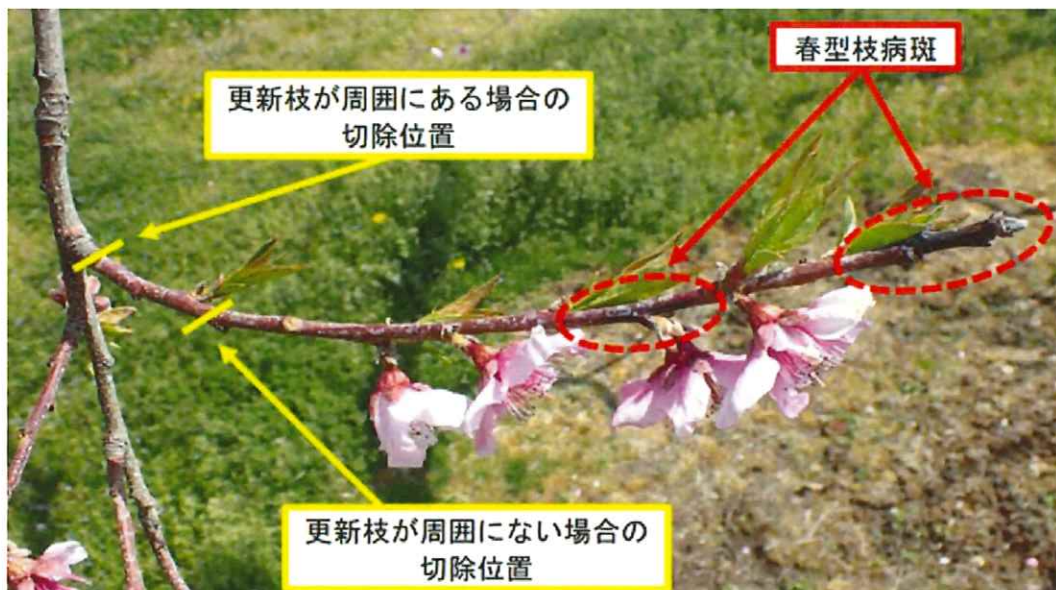


図3 春型枝病斑のせん除方法 (福島県モモせん孔細菌病対策マニュアル)

ウ クプロシールド使用上の注意点（農薬使用法は、令和6年4月10日現在の登録内容に基づき記載しています。）

（ア）薬害防止のため単用では使用せず、必ずクレフノンを加用する。

（イ）クレフノンは直接SSなどのタンクに入れず、バケツなどで小分けにして、完全に水と混ぜてから、散布直前にタンクに入れる。

（ウ）クレフノンは薬害防止を目的としたカルシウム剤であり、液肥の代わりにはならぬことから、日持ち性の向上などを目的としたカルシウム補給については別途実施する。

（エ）散布時または散布後の高温により、薬害の発生が助長される場合があるので、気象情報に注意して使用する。

（2）うどんこ病

うどんこ病（毛じ焼け症状を含む）対策として、モモの感染時期である「落花直後～落花20日後」までに、園地周辺にあるバラ科植物を除去する。

また、周辺にリンゴ園地がある場合は、リンゴのうどんこ病防除も含めた対策を実施する。

（3）灰星病

落花期の降雨などによりがく落ちが悪かった場合、果梗部分にとどまっただく片から果実腐敗が発生する危険性があるので、予備摘果とあわせてがくを除去する。



写真1 がく割れ（農業技術体系）

（4）その他害虫

モモハモグリガ、ナシヒメシンクイ等の害虫の発生時期は、モモの生育と同様に早まっているため、薬剤散布が遅れないように注意する。

- ◎ 農作業事故に注意して作業を進めましょう！
- ◎ 農薬散布後は、忘れずに防除日誌へ記帳しましょう！
- ◎ 農薬を散布する際は、隣接する園地に飛散しないように注意しましょう！
- ◎ 共済制度や収入保険制度を活用し、農業経営の安定を図りましょう！
- ◎ 地域計画策定や農地中間管理事業の活用により、地域農業を守りましょう！